

論文

コンディヤック『書く技術』における文体の教育

Stylistic education in Condillac's *« L'art d'écrire »*

中田 浩司*¹

要約：18世紀フランスの哲学者であり、感覚論の礎を築いたコンディヤックは1758年にイタリア・パルマ公国に赴任し、当時7歳であったパルマ公国王子であるフェルディナンド公の家庭教師を1767年まで約9年間務めた。そして、フェルディナンド公への教育成果は『パルマ公国王子のための教程』という著作に結実し、コンディヤックが家庭教師の任務を終えた9年後の1776年に刊行された。

『書く技術』は、コンディヤックの『パルマ公国王子のための教程』の第3巻をなす著作であり、『文法』のあと、思考に関する著作『推論する技術』そして『考える技術』に先立つ著作として、コンディヤックと文法教育を終えたフェルディナンド公がいかにして文章を執筆していく技法を学ぶのか、あるいは文章教育に関する考えを窺い知ることができる。

本論稿では、『書く技術』という著作が、コンディヤックの哲学および教育思想が結実していく著作として捉えながら、この著作において重要視される「観念結合」という概念について中心的に考察をしていく。またコンディヤックの認識論において、とりわけ思考の方法を論じる上で重要な概念となる「観念結合」は文章を書く方法においても重要な役割を示していることを提示する。

Key Words：コンディヤック、18世紀フランス教育思想、文体の教育、『書く技術』

はじめに

本論稿では、コンディヤックの『パルマ公国王子のための教程』（以下、『教程』と略す。）の一環をなす『書く技術』という著作を主たるコーパスとして、その著作の中からコンディヤックの文体教育に関する考え方を取り上げていく。

まず、論述の順序として、本稿の主たるコーパスとなる『書く技術』の書誌情報と先行研究の検討および最新の研究動向について概観する。ついで、『書く技術』に至るまでにコンディヤックがパルマ公国王子であるフェルディナンドにどのような教育を行っていたかについて『教程』の記録から論じていく。このような作業を経て、コンディヤックが『書く技術』において主張した「観念結合」について考察し、それが文体教育において重要視される「方法」として教授されることを示していきたい。

なお、本研究はコンディヤックの教育論において重要な位置を占める文体教育に関するものであり、これまでコンディヤックの教育論の研究においてほとんど言及されてこなかった『書く技術』に関する研究の端緒となる。

さらにいえば、本研究は筆者がこれまでの研究において明らかにしてきたコンディヤックの文学教育や言語教育を受け、今後推進する予定の思考法の教育に関する研究へとつながるものでもある。

I. 『書く技術』について

本論稿の主たるコーパスとなる『書く技術』について、基本的な書誌情報に触れ、この作品の先行研究を概略的に提示しておこう。

コンディヤックは1758年にイタリア・パルマ公国に赴任し、ルイ15世の孫であるフェルディナンドの家庭教師を1767年まで約9年間務めた。フェルディナンドが7歳の頃から2年間を文法や文学教育に費やし、その後、哲学や歴史などの教育をおこなったとされる。『教程』が最終的に公刊されたのは、コンディヤックが家庭教師の任務を終えた9年後の1776年である。なお、フェルディナンドへの教育に着手した時から、出版まで長い年月が流れているため、コンディヤックの教育内容がどれほど忠実に再現されているかは実際のところわからない¹⁾。

この『書く技術』は、コンディヤックの『教程』の第3巻をなす書物であり、『文法』のあと、思考に関する著作『推論する技術』そして『考える技術』に先立つ

2023年11月7日受付／2024年1月10日受理

*¹ NAKADA Hiroshi

関西福祉大学 教育学部

著作として、文法教育を終えたコンディヤックとフェルディナンドがいかにして文章を執筆していくか、つまり、文体教育に関する考えをうかがい知ることができる。

なお、これまで『書く技術』は、教育論の分野で論じられることよりもむしろ、言語学、言語哲学や美学・芸術学あるいは文体論という分野において取り扱われてきた。最も直近の研究成果として挙げられるのは、アリエノール・ベルトランの編纂により2016年にENS Editionsから上梓された『コンディヤック・言語哲学者』論文集の中の研究である。社会言語学者にしてフランス語史を専門にするソニア＝ブランカ・ロゾフは、コンディヤックの『書く技術』を次のように形容している。要点をまとめると以下の通りとなる²⁾。

1. 教育的な意図と配慮のもと書かれた著作であり文体に関する著作である。
2. いっぽうで「保守的な趣味」に失望させられる。
3. 同時代人たちの芸術的な執筆活動に対し、古典的、規範的な文体に執着している。

まず、第一の点について、先述したように『書く技術』は『文法』、『思考する技術』、『推論する技術』と共に、『教程』における言語教育の根幹をなしている。また、『書く技術』は「自由七科 (septem artes liberales)」のうち「修辞学」、『文法』は「文法」、そして、『思考する技術』『推論する技術』は「論理学」に相当する。つまり、コンディヤックの教育は、自由七科における三学 (trivium) をふくんだ言語教育であり、このような言語教育を中心に据えてコンディヤックはフェルディナンドに教育を行った。それゆえ当然教育的な意図が見受けられる。しかし、その著作を紐解いていくと、文体(style)とは何かを論じた文学的・美学的な著作でもある。

次に、第二、第三の保守的・古典的について考察してみよう。保守的という言葉について、コンディヤックの文体論の中心には、「よく書く」とは、すでに思考された内容を簡潔に表現する、曖昧さを一切排除し、誤解を与えない言い回しは避けるべきであるという考え方が根底にある。また、簡潔さや明晰性が重視され、過度な修飾表現を控えることが推奨されている。明晰性を追求するという点では、ある意味では保守的、あるいは合理主義的であり、前世紀のデカルトとの考え方にむしろ近いとも言え、あるいはリヴァロールの「明晰ならざるもの、フランス語にあらざる」という言葉も自然と想起さ

れる。ただし、コンディヤックは、デカルト主義や生得観念を根本から批判し、形而上学を刷新しようとしていたが、このようなラディカルな挑戦から考えると、文体の保守性は、その哲学の根本的な考え方とは相容れない側面もあるとも言える。

さらに、第三の同時代人たちの芸術的な執筆活動について、ここで念頭にあるのは文学的表現を駆使し、理性の限界を示すようなデイドロ、皮肉な批評精神によって体制批判を行うヴォルテール、あるいは感情と抒情をもって自伝的作品を執筆したルソー等に比べると、コンディヤックの文体は同時代人の持っている力強い文体とは程遠いということである。そういった意味で、ソニア＝ブランカ・ロゾフによる上の指摘は適切なものと言えるだろう。

ところで、この『書く技術』は、コンディヤックの著作全体のなかでは、『教程』の他の著作と同じく全く中心的なものではなく、コンディヤックの哲学の副次的なテキスト、あるいはコンディヤックの『人間認識起源論』や『感覚論』といった初期哲学的著作の内容を補足しながら、『論理学』のような後期哲学的著作の中で展開されていく思想の理解をより深めるための著作でもある。しかしながら、コンディヤックの教育学を研究するうえで、『教程』そして『書く技術』を副次的なテキストではなく、重要な著作として扱う必要がある。その理由を二つ挙げるが、まず、この『書く技術』という著作は、『教程』の「緒言」にも論じられているコンディヤックによる文学教育、文章教育の詳細な記録となっているからである。『書く技術』を分析することにより、コンディヤックがフェルディナンドにどのような文章教育をおこなったかを実証的に提示することが可能になる(ただし、これについてはコンディヤックが『書く技術』を執筆するにあたって参照した作家や著作等のソースが明らかになった上で行う必要がある、現時点では実現するのは難しいと推察される)。もう一つの理由について、コンディヤックがフェルディナンドに行ってきた教育の記録と『教程』を読み解いていけば、『書く技術』こそ、コンディヤックの哲学、教育論の意図の一貫性が結実する著作なのではないか、つまり、コンディヤックの哲学、教育論のエッセンスが凝集しているのではないかと考えられる。それゆえ、『書く技術』をコンディヤックの主要な著作として扱う必要がある。

II. 『書く技術』に至るまでの文学・文体教育

次に、『書く技術』に至るまでの文学・文体教育について見ていこう。文体の教育に至るまでに、コンディヤックとフェルディナンドは、すでに言語の美に慣れ親しむことを始めていた。詩人を学習すること、とくにコルネイユやモリエール、ボワローそして何よりもラシーヌの著作を講読しながら、文学教育をおこなっていた。コンディヤックはこのように述べる。

話す術に関する規則を学ぶ前に言語の美しさに慣れ親しまなければならない。上手に話し、また多くのことについて話すことができるようにならなければならない。そして、文法の学習は、もしあまりに早く初めてしまったら有益であるどころかうんざりするものになるだろう³⁾。

このように述べて、本格的な言語技術の教育に取り掛かるまえに、言語そのもの、あるいは言語の美そのものに触れることを優先させ、学習させることに力を注ぐ。また規則、文法ばかりを優先させる教育方法では、学習者をうんざりさせるとも主張している。なお、実際にコンディヤックがフェルディナンド王子にどのような教育を施したかについては要点を次の三点にまとめておこう⁴⁾。

1. 趣味概念 (goût) の形成のため、美の模範となる最良の作家の著作を取り上げた。
2. ボワローの『譜面台』から始めモリエール、コルネイユ、ラシーヌを読んだ。
3. これらの作品を読み、文章の規則と正確さも学び同時に「推論の技術」を学んだ。

コンディヤックはこのようなプロセスを経て、フェルディナンドの趣味概念、つまり反省を伴わない審美的判断能力を身につけさせた段階で、文法教育に移っていく。その状況をコンディヤックは次のように述べる。

王子がこの習慣を身につけた時、私は彼に私が作った文法の勉強をさせた。文法はすでに彼の手の届く範囲にあった。というのも私たちは、すでに言語の規則を示す観察のほとんどを一緒に行っていたからだ。この研究の間、私たちは詩人の講読、歴史的カテキスムの講読、聖書の講読を行った。私は私の生

徒の手に届き始め、おそらく彼を楽しませるような手紙を選びつつ、そこにセヴィニエ夫人の手紙を付け加えた⁵⁾。

ここで、この習慣と言われるのは、言語における美に慣れ親しむ習慣のことをさす。あるいは先ほど述べた趣味概念つまり判断を伴わない審美的な能力を身につけることである。そして、文学作品を講読しつつ、模範になる文章に触れ、それを観察していく。文学作品の中から文法の規則を観察し、発見して学んでいく方法を現代の外国語教育法の分野では、帰納的方法と呼ばれるが、そのような方法を用いることによって、フェルディナンド王子は文法を学んで行った。そして、このような学習を経て、フェルディナンド学習は次のステージへと到達することができる。

読書によって、彼の趣味概念は、完璧なものとなっていったが、読書のおかげで、彼はこれまで以上に彼の言語の美しさをよりよく感じるように準備したのだ。彼は『文法』を学び終えた後、『書く技術』を学ぶことができる状態になったのだ⁶⁾。

最良の作家に親しみながら、王子は、その読書において抱いたことを観察していた。そしてその観察によって自然と彼は話す技術の規則を身につけるに至った。私が、『文法』と、『書く技術』に関する論稿を書いたのは、彼をその学習において支えるためであった。これらの作品を構成するにあたって、私の意図は、彼の言語を教えるというよりか、むしろ彼が自らの言語についてすでに知っていることを考察させることであった。私は、より判明かつ広がりのある形で、彼が読書の中で行った観察を発展させたかったのである。そして、そこから文体の美を判断する習慣を堅固なものとしたかったのである⁷⁾。

一流の作家たちの文章に触れ、観察させること、発見させることは、コンディヤックの教育方法の基盤となる考え方になる。そして、ここからコンディヤックとフェルディナンドの教育では、フェルディナンドが自ら獲得した知識や技術を、自律的に使えるようにしていくことが目指される。つまり、知識を知識としてのみ獲得させるのではなく、それを技術として用いることができるように教育していくことがコンディヤックの教育の主たる

方法と言えるだろう。

それではコンディヤックは、『書く技術』において、どのようなことを中心にして、王子に教育をおこなっていくのか。次に『書く技術』の提示する最も重要な側面について見ていく。

Ⅲ. 『書く技術』と観念結合

コンディヤックは『書く技術』の冒頭において、文体の美を構成するものは、簡潔さ (netteté) と性質 (caractère) にあると述べる⁸⁾。

殿下、二つのものが、文体の美全てを形作るのです。それは、簡潔さ (netteté) と性質 (caractère) です。前者は、考えを正確にする用語を常に選ぶことを要求します。そして、あらゆる余分なものから言説を解放するのです。語の関係は、決して多義に解釈されるものではなく、すべての文章は、互いのために構成されており、思考の関係性 (つながり) や段階を顕著に示すのです⁹⁾。

文体の美において重要なことは、簡潔さと性質であるとコンディヤックは主張する。簡潔さについて、それは、コンディヤック自身がその執筆活動において最も重視した文章の特質でもあり、その哲学においてめざしたことは、曖昧な概念や無意味な言葉を廃し、可能な限り明瞭かつ正確な言葉で語ることであった。一方の性質 (caractère) について、小穴晶子は「コンディヤックにおける文体の美とキャラクター」という論文において、「キャラクターという言葉は単に一般的な用法で用いているのではなく文体の美を考える上での鍵となる概念であるということ」とし、『人間認識起源論』において特性 (génie, なおこの語には天才という意味もある) と性質という言葉と同義語としてほとんど区別なく、言語、政治体制、国民に関して用いていると分析し、caractère としての génie は天才としての génie とどのような関係を持っているのか、コンディヤックの性質を分析している¹⁰⁾。なお、本論稿では、性質に関して論じることは、設定した問題とは逸れてしまう可能性があり、機会をあらためて論じることとする。差し当たっては簡潔さの問題について考察をしていきたい。

コンディヤックは、簡潔さとは、まずは考えを正確に表現するための言葉を選択し、文章から無駄なものを排除することであると主張する。

言説の簡潔さは、特に文章の構成に依存する。つまり、言葉の配置のことである。しかし、もし、観念が精神に浮かび上がる時の順序を知らなければ、どのようにして言葉に与えるべき秩序を知ることができるのだろうか。どのように着想を得るのかわからなかったとして、いかにして書くべきかを発見できるのだろうか¹¹⁾。

簡潔さの条件としてコンディヤックは、構成、言葉の配置を第一に挙げている。たしかに言葉を適切に秩序づけ、配置していくことは、文章を執筆するうえでも、また他者に文章によって自らの思考を理解させるためには最低条件となる。しかし、言葉を上手に配置するためには、観念がいかにして精神に表れるか、そうして現れた観念がいかにして他の観念とつながっていくかという順序自体も知らなければ、さらにいえばそもそも人間がどのように観念を着想するのかということ知らなければ、簡潔さはおろか、よく書くことすらできないとコンディヤックは主張している。ではよく書くためにはどのようなことが必要になってくるのか。コンディヤックは、偽りの精神 (esprit faux) と正しい精神 (esprit juste) という対立する二つの概念を提示しながら、フェルディナンドによく書くために必要な要素を教える。

偽りの精神とは、非常に視野の狭い精神なのです。つまり、多くの観念を捉える習慣をつけていない精神の持ち主なのです。ここからわかるように、そのような精神は、観念の関係性を見逃すこともあるだろうとお分かりになるかと思います。その判断によって、真理を確固たるものとすることは不可能なのです。もしそんな精神が体系を作る野心があるならば、誤謬へと陥ってしまうでしょう。そのような精神は、矛盾に矛盾を重ね、不条理なものに不条理なものを重ねるでしょう。[...] あなたは、もし、精神を偽りのものとしないと望むなら、精神を広げることがどれほど重要であるかを感じられるでしょう¹²⁾。

コンディヤックは、このような精神は、観念の関係性を俯瞰的に捉えることはできず、観念の間に存在する思考のつながりが理解できず、真理に到達することはできないとしている。また、ここで、「そんな精神が体系を作る野心があるなら誤謬へと陥る」と述べているが、こ

のような主張は、『人間認識起源論』において展開した「野心的な形而上学、あらゆる神秘を見透かそうと望み、存在するものの本性と本質、もっとも深く隠された原因を解明しようとする形而上学」を構築したデカルトやその信奉者たちの体系の批判なのではないかとも考えられる。そしてさらにコンディヤックは次のように続ける。

精神は視野が狭いというだけで偽りのものとなるのではありません。それは視野が狭いために、多くの考えに視界を広げることができないからです。判断を下す前に把握すべきすべての関係についてさえ疑うことはしないのです。大急ぎで、でたらめに判断をするので、間違えるのです¹³⁾。

視野の狭い精神は、多く観念とその観念同士が持っている関係性を十分に把握することなく判断を下してしまうがゆえに偽りとなってしまふ。このようなコンディヤックの主張は、一見すると認識論あるいは思考法や文章執筆のために必要な能力を王子に教育している。いっほうで性急な判断をさけ、でたらめな判断を下さないようにすべきというあるべき君主の姿、道徳的教訓をもフェルディナンドに伝えているのではないかとも考えられる。コンディヤックは君主に必要な道徳をその教育の主な目的にはしなかったが、『教程』の著作全体を通して、ところどころに君主としてのあり方、格言などをちりばめており、そういった点では普通の学習そのものが君主の道徳の涵養につながっていた可能性は考えられる。いずれにせよ、視野の狭い精神では、観念の関連性などを把握することができないがために誤謬へと陥ってしまう、またこのような精神の持ち主では、当然「よく書く」ということが不可能なのである。それでは、偽りの精神の対極にある「正しい精神」とはどのようなものなのだろうか。

逆に、早くから観念の流れに焦点を当てることに慣れている人は、全てを判断するために全てを比較することがいかに必要かということを感じています。したがって体系を捉えるのに十分な広がりがない場合は、判断を保留し、すべての部分を秩序をもって観察し、何事も逃していないことを確信した場合にのみ判断を下すのです。正しい精神の性質とは、判断を下すことを避けながら誤謬を避けることなのです。つまり、いつ判断しなければならぬかを知っ

ていることなのです。偽りの精神はそれを無視し、常に判断を下すのです¹⁴⁾。

偽りの精神とは全く逆の形で、正しい精神のことが述べられている。性急な判断を避けることで、比較、秩序を持って観察を行い、判断ができるようになった段階で判断を下すことで、誤謬を避けていくことが正しい精神の特徴であるとされている。このような精神を持つことで、正しい認識、簡潔な認識が可能になる。そして、その正しい認識を可能にするのが、観念結合 (liaison des idées) であると述べる。

われわれの思考のすべての簡潔さをなすのは観念結合であること。

あなたに同時にいくつかの考えが浮かび上がったとしても、あなたが判断し、推論し、あなたが体系を作ると、それらがある特定の順序で配置されていることがわかるでしょう。それらを互いに結びつける従属関係があるのです。ところで、この結合がより大きくなればなるほど、よりこの結合を感じることができるようでしょう。また、簡潔さと広がりを持ってより着想をすることができるようでしょう。この秩序を壊してみなさい、光が消え、あなたはほんのかすかな明かりしか見えなくなるでしょう¹⁵⁾。

コンディヤックの哲学において重要な概念となる観念結合について述べられている。この観念結合とは、観念どうしの連想関係、先述した言葉の配置、あるいは言葉と意味との連想関係を含んでおり、コンディヤックの認識論の基盤をなす。コンディヤックは観念結合について『人間認識起源論』において次のような言葉を残している。

様々の連鎖あるいは小さな鎖が、基礎的観念の一つ一つからつながっていくのだと私は想定しているが、これらの連鎖や鎖は基礎的観念の系列や幾つかの観念がおそらくは共通して繋がれている輪を通して互いに結合しているのであろう。というのも、同じ一つの対象がつまりは同じ一つの観念だが、異なったいくつかの欲求と関連しているということがよくあるからだ。このようにして、われわれの知識の全てはただ一つのそして同一の連鎖、この連鎖の中のある輪はつながり、ある輪は枝分かれしている

のであるが、この連鎖をなしているのである¹⁶⁾。

人間は、この世に生を受け、成長するにつれて、さまざまなことを経験する。そのなかで、思考し、その思考した結果が観念として蓄積されていく。そしてその観念は、鎖のように蓄えられている。そして、ある行動から、ある感情を抱いたり、ある観念が想起されたりすると、その観念に、ある観念が、あたかも鎖がつながるように次々と連結していき、その観念にしたがって、その場において適切な思考ができたり、行動がとれたりするようになる。コンディヤックにおける人間の思考とは、後天的あるいは経験的に形成された観念結合の鎖をたどっていくことであり、観念結合が適切になされることが人間の思考の適切性においても重要な役割を果たしている。またこの観念結合は必然的に文体の簡潔性や正確性をなすものでもある。

観念結合は言説の簡潔さもなすのである。

この結合は、あなた自身が考えを思いつくのにとても必要であり、それを言説において維持することがいかに必要かを理解できるでしょう。言語活動においては、この秩序、この従属、この結合をはっきりと表現しなければなりません。したがって、文章を書く際になすべき原則は、観念の最も大きな結合に常に従うということなのです。この原則をさまざまに応用することであなたは、文章を書くという技法のすべての秘訣を学ぶことができるでしょう¹⁷⁾。

観念結合は、思考をより簡潔なものとし、さまざまな観念を順序に応じて理解させることに役立つものだったが、これは、文章を書く時においても同様に重要視されている。観念結合を意識し、それにしたがうことにより、言説を上手に編成できるとコンディヤックは考える。ある主題について思考する際に、ある考えを思い付いたとして、それに連関する考えを、あたかも鎖をつなげるように、順序立てて思考していくのと同じように、文章を書く際にも、ある言葉に対し、その言葉に鎖をつけていくかのごとく文章を続けていく。そうしてコンディヤックは次のように述べる。

もしこの秩序を言説において保持すれば、我々は我々の考えを伝えながら、我々の感情を伝えるということが理解できるでしょう¹⁸⁾。

よく書くためには、したがって、よく着想をするだけでは十分ではありません。そのうえに、秩序を学ばなければならないのです。その秩序の中で、あなたが一斉に垣間見た観念を次々に伝えなければならないのです。また、あなたの思考を分析することを知らなければならないのです。早いうちから、簡潔さを持って着想を得ることに慣れてください。そして、同時に、最も大きな観念結合に慣れてください¹⁹⁾。

コンディヤックは、観念結合に基づいた文章の書き方をフェルディナンドに強調した。というのは、そのような方法が、「推論」や「思考」の技術から応用可能であり、それぞれが連関しているからである。コンディヤックにおける言語の教育あるいは修辞学教育は、ただ単に、文章を書く際の修辞技術を獲得させることではなく、観念結合というコンディヤックの認識論において最も重要な精神の機能の養成を目指したものであった。そこから、それが、適切な思考に至る、別様に言えば、真理への探究を行うという考え方がコンディヤックには見られる。このように観念結合を、文章を書くという点においても重視するコンディヤックは、『書く技術』において、文章を書く際に守るべき「方法」についてフェルディナンドに教育をしていく。

IV. 『書く技術』における「方法」

『書く技術』においても、思考や推論の方法においても同じように観念結合に応じた文章執筆のあり方が提示された。では実際にどのように文章を執筆していくべきなのか。本来であれば『書く技術』の修辞技術の分析を行う必要があるが、それを詳細かつ網羅的に行うのは紙面の制約上不可能であるので、本論稿では、『書く技術』の第4章「さまざまなジャンルの作品に応じた文体の性格について」という章において展開された「方法」に関する考察から文章全体をどのように執筆していくか、その際に守るべき方法は何かということを論じていきたい。なお、方法の有益性について、コンディヤックはすでに『人間認識起源論』の最終章において、哲学や真理を提示する際に必要な方法について論じていたが、『書く技術』では違った角度で文章執筆のための方法について論を展開していく。

人は、方法を蔑むか高く評価するかである。多くの作家たちが、規則を天才の足かせとして見ている。

別の作家たちは、偉大な助けとして見ている。しかしかれらはそれをあまりに下手に選び、あまりにも強く増やしすぎたので、それを無益で有害なものとなしただけだ。全員が同じように間違っている […] ²⁰⁾。

コンディヤックは、『人間認識起源論』以来、一貫して言語における方法、あるいは規則そのものが言語の発達、進歩に必要なものであるという考えを信奉している。天才の足かせとして見られる規則であっても、例えばラシーヌなどの天才はがんにがらめとなった規則の枠を超えて詩作品を生み出し、言語（フランス語）をあるべき姿へと変えていったという考えをコンディヤックは持っている。いずれにせよ、コンディヤックが方法に重要性を与えているのは次のような引用にも見られる。

順序のない作品は詳細において成功し、その著者を良き作家へと位置付ける。しかしより多くの秩序によって、作家は成功に値するようになる。推論の領域においては、もし方法がなければすべての部分に光が広がるには不可能である。楽しみのためのものにおいては、場違いなものは全てその美しさをなくすというのはすくなくとも確かなことである ²¹⁾。

順序のない作品は詳細において成功する、ここでコンディヤックが想定しているのはモンテーニュのことではないかと考えられる。コンディヤックはモンテーニュを愛読していたと記し、順序を持たない書物が喜びを与えることもしばしばあるという趣旨を『人間認識起源論』で述べているが、推論の領域、特に哲学の著作やあるいは楽しみのために書かれた作品は順序・方法がなければ理解が難しく、また魅力も感じられないのである。そういったところから、すべての文章作品に通用する方法をコンディヤックは提示する。

私は、方法とは、したがって、最も大きな明晰性と最も大きな簡潔性と、ある主題が可能なすべての美とを和解させる技法のことを呼ぶ ²²⁾。

ではそのような定義される方法とはどのようなものなのか。

全体を形成することを学ぶ方法は、全てのジャンル

において共通なのです。それは、特に推論の作品で必要なのです。というのも注意は、共有するにつれて減少し、あまりに多くの対象に気を逸らされると精神は何も捉えられなくなるからです ²³⁾。

まず、コンディヤックはここで必要なものとして「全体を形成する」ことをあげている。推論の作品、つまり哲学に関する著作のことだが、それに限らず、詩、劇作品など全てのジャンルにあまねく通用する方法であると述べる。

ところで、興味を引くための作品における筋の統一と教育するための作品における対象の統一は、同じように、全ての部分がお互いに正確な釣り合いを持っていること、そしてお互いに従属しており、同じ目的に関連する ²⁴⁾。

「興味を引くための作品」は先の引用で見た「楽しみのためのもの」に属する作品、「教育するための作品」は哲学、推論に属する作品であると推察できる。そして目的は違っていたとしても、またどちらの作品であってもまず言説における統一を重視しながら、それぞれの執筆された部分がお互いに関連しあう、あるいは言説の中で扱われる観念が鎖のように連結していくのである。そういう意味でコンディヤックは次のように指摘する。

このように、統一性は観念の最も大きな結合の法則にわれわれを導く。統一性は、このつながりに依存しているのである。実際、この観念結合が見出されたならば、始まり、おわり、そして中間の部分が決定される。バランスを変えるものは全て削除される。そして光や楽しみを損なうことなく、何かを切り取ったり、動かしたりすることもできなくなる ²⁵⁾。

統一性は観念の最も大きな結合に導くというコンディヤックの主張は必然的なものであると考えられる。そしてコンディヤックにおける観念結合という概念は、認識論の基盤にあり、思考の簡潔性を下支えするだけでない。概念を把握し、文章を書く、それが詩、劇作品といった楽しみ領域であろうとあるいは哲学のような推論を要求する領域であろうと普遍的に適用される方法であるといえる。そしてこれこそがコンディヤックが『書く技術』のなかで重要視し、かつフェルディナンドに教育しよう

とした方法なのである。

おわりに

コンディヤックの文体教育は、ただ単に、言語を正確に使用できるように教育することや修辞の技術を獲得させることではなく、観念結合というコンディヤックの認識論において最も重要な精神の機能の養成をも目指したものであった。そこから、自律的に考えるという能力が身につく、それが、正しく思考する、正しく書くことができる、ひいては真理の探究につながるのである。

また、コンディヤックが、ラシーヌの劇作品やボワローなどの詩を学ばせたことは、文学や文体の美の体得という意図もあったが、彼らの劇作品の中には、コンディヤックが文章を書くにあたって重視する「全体を構成する」という方法が最も顕著に現れていたから、さらにいえば、劇作品がコンディヤックの主張する自然な「観念結合」を体得するためのモデルともなっていたからなのではないだろうか。

いっぽうで、文体教育で重視される「観念結合」は、『教程』の『考える技術』や『推論する技術』などの思考法を教育する場面においてどのように取り扱われるのかについては、稿を改めることとしたい。

※本研究は日本学術振興会科学研究費（研究活動スタート支援 19K23328）の助成を受けたものである。

【注】

コンディヤックからの引用は下記の版に拠るものとし、O.P. と略し、後に巻号とページ数を記す。日本語訳は筆者による。*Œuvres philosophiques de Condillac*, texte établi et présenté par Georges Le Roy, 1947-1951, PUF.3vols.

なお、2013年以降、アリエノール・ベルトランのイニシアティブにより、VRIN社からコンディヤック全集の批評校訂版が出版されはじめた。現在、主著である『人間認識起源論』（2014）、『類義語辞典』（2013）そして、『考える技術』（2023）が刊行されている。しかし、作業は難航しており、編集者の一人で、ナント大学名誉教授ミシェル・マレルブ氏に聞いたところによれば「編集作業は当初の予定から大幅に遅れている」が、「できる限り早く新しい版を出したい」ということであった。現在、最も信頼を置くことができ、コンディヤック研究者が依拠するPUFのジョルジュ・ルロワ版に注釈をつける形で編集作業を進めているが、コンディヤックが引用した著作（ラシーヌやモリエール等々の

作品）の引用箇所を確認に非常に時間がかかっている。このような事情もあり、本論稿では旧来通り PUF のジョルジュ・ルロワ版を使用する。こちらは *Œuvres philosophiques* というタイトルの示す通り、哲学的著作を中心に収録した版であり、教育に関する著作は一部省略されている。ただし、省略されているのは、歴史教育に関する箇所であり、本論稿には全く影響がない。

- 1) コンディヤックとフェルディナンドの教育、また『教程』の詳細については、以下の拙論を参照のこと。中田浩司、「コンディヤックの教育思想－『パルマ公国王子のための教程』から見る人間観」、(『奈良学園大学人間教育学研究』第3号 pp.61-71.)
- 2) Sonia Branca Rosoff, *La dimension discursive. L'art d'écrire de Condillac*, in Alienor Bertrand, *Condillac, philosophe du langage*, PUF, 2014, pp.316-343
- 3) *Cours d'étude, Motif des études qui ont été faites après les leçons préliminaires*, O.P. I, p.420-421.
- 4) 詳細については、以下の拙論を参照のこと。中田浩司、「コンディヤックの教育思想における goût について」、(『関西フランス語フランス文学』第24号 pp.3-14.) および中田浩司「コンディヤックの言語教育論」(『関西フランス語フランス文学』第27号 pp.27-37.)
- 5) *Cours d'étude, Motif des études qui ont été faites après les leçons préliminaires*, O.P. I, p.421.
- 6) *Ibid.*
- 7) *Cours d'étude, Discours préliminaire*, O.P.I, p.402.
- 8) 『書く技術』における観念結合については、すでに、拙論「コンディヤックの言語教育論－詩の役割と観念結合について－」(『宝塚医療大学紀要』, 第8号, pp.13-23.) においてその概要を論じているが、本稿においては、コンディヤックの『書く技術』を詳細に検討し、以前の拙論において展開した論をより補強するような形で論じている。
- 9) *Cours d'étude, Traité d'écrire*, O.P. I, p.517.
- 10) 小穴晶子、「コンディヤックにおける文体の美とキャラクター」、『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要』1983, pp.156-173.
- 11) *Cours d'étude, Traité d'écrire*, O.P. I, p.518.
- 12) *Ibid.*, p.519.
- 13) *Ibid.*, p.520.
- 14) *Ibid.*
- 15) *Ibid.*
- 16) *Essai sur l'origine des connaissances humaines*, O.P.I, p.17.
- 17) *Cours d'étude, Traité d'écrire*, O.P. I, p.520.
- 18) *Ibid.*

- 19) *Ibid.*, p.539.
- 20) *Ibid.*, p.591.
- 21) *Ibid.*
- 22) *Ibid.*
- 23) *Ibid.*, p.593.
- 24) *Ibid.*
- 25) *Ibid.*